

朝鮮時代の絵画

— 19世紀の民画を中心に

〔前期〕 9月13日(火) — 10月16日(日)
 〔後期〕 10月18日(火) — 11月23日(水・祝)

※前期・後期で絵画作品を大幅に入れ替え致します
 月曜休館(祝日の場合は翌日休館) 10:00 - 17:00(入館は16:30まで)
 〔入館料・前後期共通券〕
 一般1,500円、大高生800円、中小生300円
 ※他の割引券との併用はできません
 〔入館料・各期入館券〕
 一般1,000円、大高生500円、中小生200円
 西館公開日(旧柳邸、入館16:00迄)・会期中の第2水曜、第3水曜、第2土曜、第3土曜
 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-33
 TEL 03-3467-4527 / 交通・京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分

日本民藝館
<http://www.mingeikan.or.jp/>



蓮華図(部分) 19世紀
 〔前期・後期展示〕



十長生図屏風(部分)
 絹、刺繍 19世紀
 〔※前期展示〕



花鳥図(部分)
 紙本着色 19世紀
 〔※後期展示〕



瀟湘八景 平沙落雁図(部分)
 紙本着色 19世紀
 〔※後期展示〕



文字絵 孝(4幅のうち)
 紙本着色 19世紀 77.0 × 39.0 cm
 〔※前期展示〕



冊架図(2曲1隻のうち)
 紙本着色 19世紀 64.0 × 31.8 cm
 〔※前期・後期展示〕



花下狗子図
 絹本着色 16世紀
 106・5 × 48・5 cm
 〔※前期展示〕



1921年、日本で初めて朝鮮時代の工芸を紹介した「朝鮮民族美術展覧会」会場での柳宗悦。壁面には民画が並ぶ。



架鷹図 李巖 絹本着色 16世紀 87・5×53・8 cm (※後期展示)



松に鶴図(部分) 紙本着色 19世紀 (※後期展示)

朝鮮時代の絵画 — 19世紀の民画を中心に

朝鮮半島では、朝鮮時代後期から末期にかけて、文化の大衆化が著しく進み、人々は絵画を屏風などにして家具や調度のように室内に配し、日常生活の中で用いてきました。その画題は用途により異なり、女性の部屋では富貴寿福を象徴する花鳥図、男性の部屋では山水図など、また儒教精神を表した文字絵のほか、虎鶴図や冊架図など、バリエーションに富んでいます。一般に「朝鮮民画」と呼ばれるそれらは、伝統的な描法や合理的な構図にとらわれることなく、明快でのびのびとした表現による、大らかな魅力に満ちています。

日本民藝館の創設者・柳宗悦(1889-1961)は、1920年代に朝鮮時代の陶磁器を初めて日本に紹介した人物の一人として知られていますが、その時から朝鮮絵画にも関心を持ってきました。しかし、朝鮮の民画を集中的に集めたのは比較的晩年の時期にあたります。1950年代に朝鮮民画を数多く蒐集し、1957年(昭和32)には「朝鮮画を眺めて」、1959年(昭和34)には「不思議な朝鮮民画」を発表し、朝鮮民画の融通無碍な表現を高く評価しました。柳宗悦によるこれらのコレクションとその紹介は、日本に「朝鮮民画」が知られていく契機の一つとなっていきます。

その後、韓国との国交の正常化や、日本の高度経済成長期を経て、1970-80年代にかけては数多くの朝鮮民画が日本に将来され、展覧会や書籍の出版を通して、「朝鮮民画(李朝民画)」という呼称は一般にも次第に定着していくようになりました。この頃日本民藝館では、優れた蒐集家としても知られる染色家の芹沢銈介(1895-1984)から、朝鮮民画のまとまった寄贈を受けています。また近年では、韓国でも「民画」を再評価する展覧会が開かれたり、日本でも「朝鮮民画」を朝鮮絵画史全体の広がりの中で捉えようとする試みが見られるなど、その認識は大きな拡がりをみせています。

柳宗悦による日本民藝館の朝鮮絵画コレクションは、その優れた価値を認識させるための契機を作り出した、先駆的な役割を果たしたものといえましょう。

また日本民藝館には、朝鮮時代を代表する画家による絵画や、宮中で使用された記録画など、「民画」ではなく上層知識人のための絵画も所蔵されています。中でも、朝鮮時代の宗室出身の画家・李巖(1499-1546以降)による「花下狗子図」は、朝鮮絵画史を語る上でも重要な作品に位置付けられます。

本展では、日本民藝館の所蔵する朝鮮時代の絵画のうち、前期・後期併せて約100点を展示し、日本の眼によって見出された朝鮮時代の絵画を紹介します。 ※前・後期で作品を入れ替え致します

記念講演会 朝鮮王朝中期の花鳥画 — 「民画」への射程

講師 板倉 聖哲(東京大学准教授) 日時・10月1日(土) 18:00-19:30
会場・日本民藝館大展示室 料金・300円(入館料別) 定員・100名(要予約)

展示室 1 階

〔玄関〕日本の民窯

民窯とは民衆の日用雑器を焼いた窯で、甕・壺・皿・鉢・碗・片口・播鉢などが数多く作られました。この部屋では、唐津、小代、苗代川など九州諸窯の古陶を中心に、瀬戸や美濃の古陶を交えながら、当館が所蔵する日本民窯の優品を紹介します。

〔第1室〕丹波の古陶

柳宗悦は丹波焼を「最も日本らしき品、渋さの極みを語る品」と評し、茶陶ではない実用陶器にその真価を見出しました。中世期の自然釉の壺をはじめ、赤土部・流し釉・線彫・白絵掛など、多彩な技法を用いた江戸期の丹波古陶を紹介します。

〔第2室〕木・竹・革の工芸

当館が所蔵する工芸品の中から、木や竹、革などの造形を紹介いたします。刳物や曲木による木工類、竹や樺を編んで作った生活用品、革箱や金唐革の喫煙具など、身近な素材を生かして工芸品を生み出した職人の技を見ることができます。

〔第3室〕日本の染織

江戸末から昭和初期まで日本各地で作られ、民間で使われた染と織の着物や布を展示します。それらは、丹波布、黄八丈、木綿や苧麻の紉、絹や木綿の縞・格子や藍絞染など、暮らしに根づいた素朴な染織品です。柳宗悦は丹波布を「渋さの美、温かさの美、雅致の美が際立った布」と讃えました。

展示室 2 階

〔大展示室〕朝鮮時代の絵画 — 19世紀の民画を中心に

〔第1室〕朝鮮時代の陶磁

当館所蔵の大井戸茶碗・銘「山伏」は武者小路千家旧蔵品で、柳宗悦は晩年の1953年(昭和28)に入手しています。そして著作の挿絵や第二回「民藝館茶会」(1956年)で用いました。今回はこの「山伏」などの茶碗を中心に、約50点の朝鮮陶磁を展示いたします。

〔第2室〕B・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司の陶磁

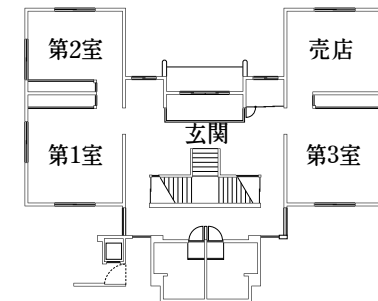
柳宗悦は三人の特質を、陶画の優れたリーチ、釉薬の鮮やかな河井、形態の確かな濱田と認め、高く評価いたしました。そして人としても厚い信頼をおき、その友情を生涯にわたり育みました。当館が所蔵する三人の作品の中から、代表作約50点を展示いたします。

〔第3室〕朝鮮時代の絵画 — 鑑賞画と記録画を中心に

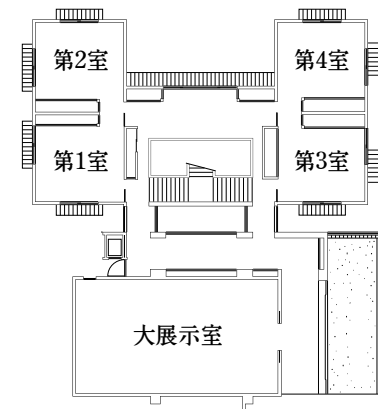
柳宗悦が「民画」以外に眼を向けたもう一つの朝鮮絵画の系譜である、画家による絵画や宮中画。日本民藝館では、これら知識人のための絵画を約20点ほど所蔵しています。犬や鷹などの禽獣図に独特な作風を確立した画家・李巖の作品を軸に、特集展示いたします。 ※前・後期で作品を入れ替え致します

〔第4室〕朝鮮時代の諸工芸

柳宗悦は生涯に朝鮮半島を21回訪ねています。その間、様々な産地を訪ね、陶磁器のみならず、木漆工、金工、石工、紙工、竹工など民族色を色濃く受けた優れた朝鮮工芸の数々を蒐集しました。1920年から30年代に柳らによって蒐集されたものを中心に、朝鮮諸工芸の優品を紹介します。



〔1階第1室〕赤土部釉灰被壺 江戸時代 17世紀 高30.0 cm



〔2階第1室〕大井戸茶碗 銘「山伏」 朝鮮時代 16世紀 径16.1 cm